

平成30年7月
夏号

Vol.4

響きあい



老人福祉施設カリヨンの郷
施設長 早川直也

平成時代もカウンタダウンが始まり、改めて「昭和」はどんな時代だったのかと、考えてみました。

カリヨン福祉会の利用者や入所者を始め私も同様ですが、とにかく「モノと情報」が無い時代でした。

モノが極端に無い中でも、「強い思い」と「バイタリティーや気概」をもって我々の大先輩方は昭和を牽引してきました。

昭和三十年代は、東京オリンピック、東海道新幹線、東名高速道路、東京タワーの建築など、目の前での成長が実感できる時代でした。大型クレーンや重機、コンピュータや計算機などがない時代、安全配慮や労働環境なども整備されてなく、まさに命がけて人海戦術に頼って作りあげてきました。図面は手書きで、ダイヤグラムも手書きであり、現在でも当時のシステムが基本とききます。

蟹江に近い場所では、「御在所ロープウェイ（昭和三十四年竣工）」があり、その姿には圧倒されます。

急峻な斜面に鉄塔を立て、長く太いワイヤロープを張り、ゴンドラを通し、約六十年が経過した今でも現

役で、当時の技術力の高さに圧倒されると同時に、様々な分野で現場で関わった皆さんの「強い思い（矜持）」が伝わってきます。

◆ ◆ ◆
今ある豊かな日本の基礎となる「昭和時代」を築いてきた方々に対し、改めてリスペクトしてほしいものです。

食べ物を「粗末にできない」「モノが捨てられない」「他人の意見をなかなか受け入れられない」などは、育った時代の影響だと思えます。例えば、食品に対する消費期限の概念すらない時代、「視覚・嗅覚・味覚」がすべてで、自己判断（責任）が基本でした。

今でも食品に表示してある製造日より経験（体感）を優先してしまう。自然に対しては「謙虚で、従順で」、他者への批判より自分の未熟さを恥じ、一番の強みは「生きる力」が備わっていた。

高齢者の特徴として、今とは違い情報も極めて少なかったため、新聞や本などの活字やテレビを優先し、「物事の良し悪しの判断基準」は、視覚情報が第一で、どうしても過去の経験値に裏打ちされる傾向があります。

